

## ICT分野における技術戦略検討会（第8回）議事要旨

1 日時 平成30年5月31日（木）10:00～11:30

2 場所 総務省第3特別会議室（9階）

3 出席者

（1）構成員（敬称略）

長谷川座長、中尾座長代理、江村構成員、澤谷構成員、関谷構成員、田中構成員、眞野構成員、宇佐見構成員代理

（2）総務省

小林総務大臣政務官、今林国際戦略局長、椿国際戦略局参事官、布施田技術政策課長、山碕国際政策課長、中溝通信規格課長、田沼研究推進室長、杵浦技術政策課統括補佐

4 議事要旨

情報通信技術分野における研究開発の推進方策について、事務局より資料8-1に基づき説明が行われ、その後、意見交換が行われた。

主な意見は以下のとおり。

### 【働き方、人材育成、環境作り】

- 若い人たちは決して楽をしようと思っっているわけではなく、やりがいを見つけないという気持ちがあり、目標や意義があればもっと働きたいという人もいる。
- 残業はしない方が良いが、時間外に働くとしても1つの会社に長くいるのではなく、パラレルワークとして会社の外で活動し、多様性を担保していくことが重要
- 今の子どもたちが大人になった時に、何になりたいか、何になれば格好良いか、と思わせるような方策を国として打ち出すことができないか。
- 技術を実装していく観点では、各地域の高専に応援していきたい。地域課題に近いところで活動している上に、若くて技術も持っている。高専生同士が集まる機会があると、そこからコミュニティ形成も進んでいく。
- 上位レイヤのエンジニアばかりになってしまうのも良くなく、通信レイヤを作って使わせる側でリーダーシップを発揮していくことも重要。
- 異なる技術の境界域は、融合領域として大きなイノベーションを生む源泉になり得

るため、ダイナミックレンジの広い仕事をしていくことが重要。

- 人と人がカップリングして新しいものを生み出すような環境を作っていくことが必要。そのためには、人材を見える化したり、参入障壁を低くしたりしていくことが有効。
- アジャイル開発センターのような組織で実際に人を集めて取り組んでみると、オープンソースを使って何かできて、何ができないのかが見えてくる。これによって、人が非常に育っている。
- 仮に1日で出来上がったものでも成果が出ていれば、それを評価して、成果に対して対価を支払うような方向に進んでいくと良いと思う。
- コミュニティに入れてもらうのではなく、自らコミュニティを作り、ソーシャライズしていくことが重要。
- 資料の中に4つのDが出てくるが、「深い人材」という意味でのDeepを追加し、Dreamを真ん中に書いてはどうか。

#### 【技術の進展、環境の変化】

- 決済などの金融情報や、個人に関する情報などがAI時代におけるデータとしての新たなインフラになりつつあると感じている。
- 現状ベースで考えるのではなく、20年後くらいには社会の構造が変わっているということを前提に議論を進めていくことが必要。
- ソフトウェア化自体が重要なのではなく、ソフトウェア化によってモジュール化が進み、それを組み合わせて設計する人達が成功している。

#### 【研究開発の推進方策、評価の在り方】

- 身近な課題解決型の研究や基礎研究など、どれか1つの領域ばかりに集中するのではなく、複数の領域を行ったり来たりするような取組を推進できると良い。
- 国の研究開発施策では、開発目標、開発項目及びアプローチの変更が難しいが、社会情勢の変化に応じてピボットできる柔軟性が必要ではないか。
- 研究開発プロジェクトを実施する際には、評価する側の産業界・アカデミアのバランスや、プロジェクト側の大企業・ベンチャー企業のバランスなど、違う領域の人達を政策的に混ぜていくことが必要。
- 特許数や論文数に囚われすぎず、世の中へのインパクトも重視した評価を行うことが必要。
- 社会実装に近い研究については、成果として実際にモノを見せてもらうような機

会・場も必要。

- 技術以外の評価軸（メンバーの多様性（産学、国際、若手）、雇用創出効果など）も重視すべきではないかと思う。
- フィージビリティスタディやステージゲートなどの仕組みを実効性のある形で取り入れることも有効。
- 複数チームが競い合う競争原理を取り入れ、複数チーム間の相対評価ができると良いと思う。
- 不正行為を防止するためのチェックと、プロジェクトの成否の評価は分けて考えることが必要。